

下二段		上二段										下二段	上二段					四段					活用 種類				
ガ行	カ行	ア行	ラ行	ヤ行	マ行	バ行	ハ行	ダ行	タ行	ガ行	カ行	カ行	ワ行	ヤ行	マ行	ハ行	ナ行	カ行	ラ行	マ行	バ行	ハ行	タ行	サ行	ガ行	カ行	行
逃ぐ	受く	得 <small>う</small>	古 <small>ふる</small>	悔 <small>く</small>	恨 <small>む</small>	滅 <small>ぶ</small>	恋 <small>ふ</small>	恥 <small>づ</small>	落 <small>つ</small>	過 <small>ぐ</small>	起 <small>く</small>	蹴 <small>る</small>	居 <small>る</small>	射 <small>る</small>	見 <small>る</small>	干 <small>る</small>	似 <small>る</small>	着 <small>る</small>	折 <small>る</small>	望 <small>む</small>	呼 <small>ぶ</small>	思 <small>ふ</small>	打 <small>つ</small>	押 <small>す</small>	急 <small>ぐ</small>	咲 <small>く</small>	例語
逃	受	(得)	古	悔	恨	滅	恋	恥	落	過	起	(蹴)	(居)	(射)	(見)	(干)	(似)	(着)	折	望	呼	思	打	押	急	咲	語幹
げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	け	ゐ	い	み	ひ	に	き	ら	ま	ば	は	た	さ	が	か	未然形
げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	け	ゐ	い	み	ひ	に	き	り	み	び	ひ	ち	し	ぎ	き	連用形
ぐ	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	ける	ゐる	いる	みる	ひる	にる	きる	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	終止形
ぐる	くる	うる	るる	ゆる	むる	ぶる	ふる	づる	つる	ぐる	くる	ける	ゐる	いる	みる	ひる	にる	きる	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	連体形
ぐれ	くれ	うれ	るれ	ゆれ	むれ	ぶれ	ふれ	づれ	つれ	ぐれ	くれ	けれ	ゐれ	いれ	みれ	ひれ	にれ	きれ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	已然形
げよ	けよ	えよ	りよ	いよ	みよ	びよ	ひよ	ぢよ	ちよ	ぎよ	きよ	けよ	ゐよ	いよ	みよ	ひよ	によ	きよ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	命令形

はしがき

本書は、文語文法のなかの用言（動詞・形容詞・形容動詞）について、ポイントを確認しながら問題を解き、基礎力を養うことを目的としたワークブックです。

編集にあたっては、日栄社版『新・要説文語文法 五訂新版』の準拠問題集としても、あるいは、全く独立した文語文法・用言の基礎問題集としても使うことができるよう配慮してあります。

【本書の特長】

① ポイントの確認と演習

各回とも見開き2ページとし、右ページには、上段にその回のポイント、下段に「確認問題」を収録しました。左ページは、右ページの応用として、古文の文章を読んで「練習問題」を解くかたちにしました。

② 読みやすく面白い古文

各回の「練習問題」の古文は、読みやすく、面白く感じられるものを採録しました。わきに色刷りで口語訳をつけ、楽しみながら効果的に学習できるようにしてあります。

③ 「復習問題」「総合問題」

学習の定着をはかるため、適宜「復習問題」を配置し、最後に「総合問題」を設けました。

本書が、皆さんの古文学習の一助となることを祈っています。

活用 種類	行
行	サ行
例語	寄す
語幹	寄
未然形	せ
連用形	せ
終止形	す
連体形	する
已然形	すれ
命令形	せよ

下二段													活用 種類		
ラ変	ナ変	サ変	カ変	ワ行	ラ行	ヤ行	マ行	バ行	ハ行	ナ行	タ行	タ行	ザ行	サ行	行
あり	死ぬ	す	来	植う	暮る	覚ゆ	誉む	述ぶ	経 <small>つ</small>	寝 <small>る</small>	出 <small>づ</small>	捨 <small>つ</small>	混 <small>ず</small>	寄 <small>す</small>	例語
あ	死	(す)	(来)	植	暮	覚	誉	述	(経)	(寝)	出	捨	混	寄	語幹
ら	な	せ	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	未然形
りに	し	き	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	連用形	
りぬ	す	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	終止形	
る	ぬる	する	くる	うる	ゆる	むる	ぶる	ふる	ぬる	づる	つる	ずる	する	連体形	
れ	ぬれ	すれ	くれ	うれ	ゆれ	むれ	ぶれ	ふれ	ぬれ	づれ	つれ	ずれ	すれ	已然形	
れ	ね	せよ	(こ)よ	ゑよ	れよ	えよ	めよ	べよ	へよ	ねよ	でよ	てよ	ぜよ	せよ	命令形

■ 形容詞活用表

種類	ク活用	シク活用
例語	なし	美し
語幹	な	美
未然形	(く)から	(しく)しから
連用形	かり	しかり
終止形	し	し
連体形	きる	しきる
已然形	けれ	しけれ
命令形	かれ	しかれ

■ 形容動詞活用表

種類	ナリ活用	タリ活用
例語	静なり	堂々 <small>どうどう</small> たり
語幹	静か	堂々
未然形	なら	たら
連用形	なりに	たりに
終止形	なり	たり
連体形	なる	たる
已然形	なれ	たれ
命令形	(な)れ	(た)れ

目次

1	歴史的仮名遣い	2
2	四段活用動詞	4
3	復習問題 1	6
4	上二段・下二段活用動詞	8
5	上二段活用動詞	10
6	下二段活用動詞	12
7	復習問題 2	14
8	カ変・サ変・ナ変・ラ変動詞	16
9	本動詞・補助動詞・動詞の音便	18
10	復習問題 3	20
11	形容詞	22
12	形容動詞	24
13	復習問題 4	26
14	総合問題 1	28
15	総合問題 2	30

(付録) 動詞活用表・形容詞活用表・形容動詞活用表

●上二段活用

語尾が「イ(i)」「エ(e)」段の一段のみに活用する。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
見る	(見)	み	み	みる	みる	みれ	みよ	マ行
下に続く主な語	ず・む	て・けり	(言いつ切る)	ときごと	ば・ども	(命令)		

※語幹と語尾の区別がない。

●活用の種類の見分け方 (次の九語とその複合動詞のみ)

着る・似る・煮る・干る(乾る)
見る・射る・鑄る・居る・率る

〈複合動詞〉試みる・顧みる・率ある・用ある など

※複合動詞には語幹と語尾の区別がある。

●下二段活用

語尾が「エ(e)」段の一段のみに活用する。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
蹴る	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けよ	カ行
下に続く主な語	ず・む	て・けり	(言いつ切る)	ときごと	ば・ども	(命令)		

※語幹と語尾の区別がない。

●活用の種類の見分け方

蹴るのみ

確認問題

1 次の上二段・下二段活用動詞の活用表を完成させなさい。

蹴る	試みる	居る	干る	着る	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
				(着)					きる			

2 次の傍線部の上二段活用動詞の行と活用形を答えなさい。

- ① 心ざしあるに似たり。
- ② よく見れば、
- ③ 弓射ることを習ふに、
- ④ あるにしたがひて用ゐよ。
- ⑤ 御車にて率て行く。

⑤	③	①
行	行	行
形	形	形
	④	②
	行	行
	形	形

練習問題

■次の文章を読んで下の問いに答えなさい。

一休和尚は、いとけなき時より常の人には変はり給ひて、利根発明なりけるとかや。師の坊をば養叟和尚と申しける。こびたる旦那ありて、常に来たりて和尚に参学などし侍りては、一休の発明なるを心地よく思ひて、折々は戯れを言ひて問答などしけり。ある時かの旦那、皮袴を①着て来たりけるを、一休門外にてちらと②見、内へ走り入りて、へぎに書き付け立てられけるは、

この寺の内へかはのたぐひ、固く禁制なり。もしかはこのもの入る時は、その身に必ずばち当たるべし。

と書き置かれける。かの旦那これを③見て、「皮のたぐひにはち当たるならば、このお寺の太鼓は何とし給ふぞ。」と申しける。一休聞き給ひ、「さればとよ、夜昼三度づつ撥当たる間、その方へも太鼓の撥を当て申さん、皮の袴、④着られけるほどに。」とおどけられけり。

〔語注〕利根発明…利発で賢いこと。皮袴…皮で作った袴。へぎ…薄くけずった板切れ。撥…楽器を弾き鳴らす道具。

(一休ばなし)

1 傍線部①・④「着」について、活用の種類と終止形、それぞれの活用形を答えなさい。

行	活用	終止形
活用形	①	形
	④	形

2 傍線部②・③「見」について、活用の種類と終止形、それぞれの活用形を答えなさい。

行	活用	終止形
活用形	②	形
	③	形

3 次の傍線部の動詞の終止形を、平板名で書きなさい。また、活用の仕方が他と異なるものを一つ選び、その記号と活用の種類を答えなさい。

ア	イ	ウ	エ
ア 母、一尺の鏡を鑄させて、	イ とうつくしうてゐたり。	ウ 蹴られたりしを病ひにて死にけり。	エ 漕ぎ上るに、河の水乾て悩みわづらふ。
(更級日記)	(竹取物語)	(落窪物語)	(土佐日記)

■ 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

またの日に成りて、昨日参らざりし相撲すまひなどを、あまた a 召し集めて、人勝ちになりて、通らんと構ふるを、大学の衆も、さや b 心得にけん、昨日よりは人多くなりて、かしがましう、「鳴り制せん。」と言ひ立てりけるに、この相撲ども c うち群れを中に立ちて、過ぐさじと思ふ気色けしよしたり。成村、「d 蹴よ。」と言ひつる相撲に目をくはせければ、この相撲、人より丈高く大きに、若く勇みたる男おのこにて、くくり高やかに b かき上げて、さし進み歩み寄る。それに續きて、異相撲もただ通りに通らんとするを、かの衆どもも通さじとする程に、尻しり蹴んとする相撲、かく言ふ衆に c 走りかかりて、蹴倒さんと、足をいたくもたげたるを、この衆は目をかけて、背をたはめてちがひければ、蹴外して、足の高く上がりて、のけざまになるやうにしたる足を、大学の衆取りてけり。その相撲を、細き杖つえなどを人の持ちたるやうに引きさげて、かたへの相撲に走りかかりければ、それを e 見て、かたへの相撲逃げけるを d 追ひかけて、その手に提さげたる相撲をば投げければ、振りぬきて、二、三段ばかり投げられて、倒れ伏しにけり。身碎けて f 起き上がるべくもなくなりぬ。

(宇治拾遺物語)

語注

またの日 前日、相撲取りたちと大学寮の学生たちとの間に争いがあった。その翌日のこと。
相撲 相撲取りのこと。
人勝ちになりて 大勢になって。
通らんと構ふるを (相撲取りたちは) 前日通れなかった道を今日は通ろうと構えていたが。
大学の衆 大学寮の学生。
鳴り制せん 静かにせよ、の意。当時の決まり文句。
例のこと いつものこと。
過ぐさじ 通すまい。
成村 相撲取り集団のリーダーの名。
目をくはせければ 目配せをしたので。
くくり高やかにかき上げて くくりひもで袴はかまの両側を高くかき上げて。
異相撲 他の相撲取りたち。
かく言ふ衆 「鳴り制せん。」と言う学生。
いたくもたげたる 高く持ち上げた。
背をたはめてちがひければ 背をかがめて体をかわしたので。
かたへの相撲 そばにいた相撲取り。
振りぬきて 振り飛ばされて。
二、三段 一段は六間(約十一メートル)。

1 傍線部①～⑦の動詞について、活用の種類、終止形、文中での活用形をそれぞれ答えなさい。

- ① 通らんと構ふるを
- ② さや心得にけん
- ③ この相撲どもうち群れて
- ④ 「蹴よ。」と言ひつる
- ⑤ 尻蹴んとする相撲
- ⑥ それを見て
- ⑦ 起き上がるべくも

⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	活用の種類	終止形	活用形
行	行	行	行	行	行	行	活用		形
活用			形						

2 傍線部②「心得」について、文中での読み方と、終止形の読み方を、全て平仮名で書きなさい。

文中	
終止形	

3 二重傍線部 a、d の動詞の中で、活用の仕方が他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。また、その動詞と、他の動詞が、何段活用か答えなさい。

異なるもの	
他の動詞	活用

4 波線部「細き杖などを人の持ちたるやうに引きさげて」は、誰の、どんな様子を表しているか。次の説明文の空欄にあてはまる語句を、Aは四字、Bは二字で文中から抜き出し、Cは二字の語句を考えて答えなさい。

・ A が、体の大きな B 取りを、 C と持っている様子。

A	
C	
	B